

【Learning for All メディア掲載実績一例】



↑読売新聞 特別面 (2020.01.07)

「令和を拓く」というテーマで、漫画家・浦沢直樹氏などと共に読売新聞の新年特別面にLFA代表・李のインタビューが掲載されました。
「平成世代の夢」という未来を創ることに挑戦する若者のひとりとして紹介されています。

すべての子どもたちの可能性を育む 「学びと暮らし」の伴走者

李 炳植

27

Learning for All 代表理事

兵庫県尼崎市、生活保護世帯の多い集合団地で育った李は、その環境から思い知らされた。家庭の貧しさが子どもたちの学習形成を困難にし、それが就職につながらず、やがて貧困が再生産されていく事実を。そんな負の連鎖を断ち切るために、彼が代表理事を務めるLearning for Allは貧困世帯の子どもたちの学習支援に注力してきた。だが、活動のなかで李は「学習支援だけでは足りない」と気づくことになる。学習以前にある生活習慣や愛着形成の問題、子ども一人ひとりの「家庭の事情」全般

に引き合わなければ、根本的な改善に至らない——そう考えた彼らは、食事提供や歯の磨き方といった生活指導などまで含めた包括的なサポートを行う「子どもの家」事業をスタート。今後はこの「家」でも学校でもない第3の居場所を拠点としながら、自治体や学校も巻き込んで、社会全体で子どもの成長を支えていく「子ども支援の生態系モデル」の確立を目指す。「どんな環境にいる子どもにも可能性があって、自分の力で人生を切り拓ける。僕は彼らにとっての伴走者でありたい。」

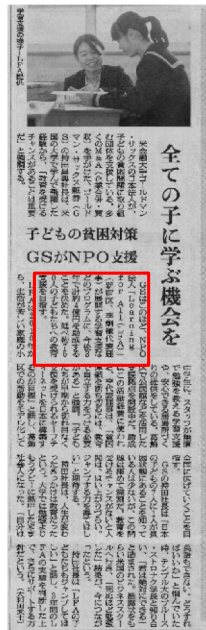


↑Forbes JAPAN (2018年10月号)

世界を変える30歳未満の若者たち30人
「30 UNDER 30 JAPAN2018」に李が選出されました

↑日テレNEWS24「The social」(2020年1月27日)

代表李がコメンテーターとして出演しました



↑朝日新聞 (2019.01.24)
ゴールドマン・サックス様がLearning for All への支援を
決めたことが掲載されました



↑朝日新聞 (2019.10.02)
代表の李と映画監督の是枝裕和氏、編集者の岸優希氏の3名
で行われた対談記事が掲載されました



↑NewsPicks (2019.07.08)
7月8日(月) から12日(金)までの5日間、ニュースメ
ディア NewsPicks人気シリーズの「Innovators Talk」
にて、代表の李へのインタビューが連載されました。

私見 貧しい子供たちへの投資 今こそ

ゴールドマン・サックス証券社長 持田 昌典

「貧しい子供たちへの投資」は、教育格差を是正し、社会の持続可能性を高めるための重要な課題である。私は、この問題に対して、金融機関として、そして企業として、積極的に取り組むべきであると考えている。

まず、教育格差の現状について。日本では、貧しい家庭の子供は、教育費の面で不利な立場に置かれている。特に、私立学校に通う子供は、家庭の経済状況によって、教育を受ける機会が限られる。これは、社会全体の生産性を低下させ、長期的な経済成長を阻害する要因となる。

そこで、私は、金融機関として、教育格差の是正に貢献できる役割を担うべきであると考えている。具体的には、教育費の負担を軽減するための融資や、教育機関への投資を行うべきである。また、企業として、教育支援プログラムを実施し、貧しい家庭の子供に学習機会の提供を行うべきである。

「Learning for All」は、このような取り組みの一例である。私たちは、このプログラムを通じて、貧しい家庭の子供に、質の高い教育を受ける機会を提供し、社会全体の向上に貢献したいと考えている。

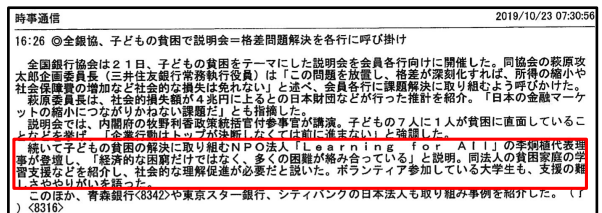
↑日本経済新聞(2019.08.29)

ゴールドマン・サックス証券の持田昌典社長のコラムにて、
Learning for All が紹介されました。



ニッキン (2019.10.25)

日本金融通信社が販売・作成を行う
金融専門紙「ニッキン」にて、
全国金融協会が行った「子どもの
貧困」に関する説明会に代表 李が
登壇した様子が紹介されました。

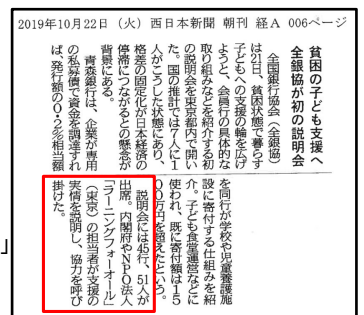


時事通信 (2019.10.23) ↑

西日本新聞 (2019.10.22) →

「ニッキン」同様に、代表 李が
登壇をした全国銀行協会で行われた
説明会の様子が掲載されました。

さらにこの全国銀行協会の説明会に
李が登壇した様子は「金融経済新聞」
「中国新聞」「岩手日報」など、
新聞を中心に全部で14媒体に掲載
されました。





↑→朝日新聞 別刷『be』(2020.04.25) 「フロントランナー」というコーナーで1面と3面に李のインタビューが掲載されました。

「フロントランナー」Learning for All 代表理事・李炯植さん 変わり続け、学習支援の先へ

有料記事

2020年4月25日 3時30分

シェア ツイート フォックページ スクラップ メール 印刷



「学生には一生忘れられない経験をしてほしい」。オフィスに学生たちの議論の足跡をたどった図が飾られていた。＝東京都新宿区

ゴールドマン・サックス、日本財団、大和証券グループ。子どもの貧困とたたかうこの NPO 法人には、大企業や財団から次々に支援が寄せられる。始動5年で事業規模を当初の7倍の3億円近くまで引き上げた。

「フロントランナー」李炯植さん 「僕は補助輪。胸を張るのは子どもたち」

東京の下町や埼玉、茨城県で「寺子屋」を営む。所得が低い家庭の小中学生を、学生ボランティアが無償で教える。少数指導の学習支援だ。

見学に来る企業人は徹底した「仕組み化」に目を見張る。教材は学生の作ったものを全部ネット上に蓄える。良いものを抽出して共有し、生徒に合わせ加工して使う。教室に観察専従の学生を置き、授業後に講師と反論点を詰める。「僕らも学習し続ける。変わり続ける。そここうそはつかない」

原点は初めて学生講師をしたときの苦い記憶にある。前身の団体で 高校受験 を目前に控えた3人を担当した。ところが、先輩たちは志望校すら把握していない。結局だれも志望校に合格させてやれなかった。

「これでは生徒は『やっぱり自分ではできないんだ』という無力感しかかるものがない」。教員やケースワーカーに教えを請い、仲間と一からやり方を見直した。机の配置ひとつにもこだわった。生徒が2人なら三角形を作る。講師は壁を背にして座る。生徒は先生しか目に入らず、気が散らない。

難題は質の維持だった。ボランティアは原則3カ月交代で、1年続けば長い方だ。だから良い教え方を編み出しても引き継がれない。入れ替わりのたび授業の完成度が下がる。乗り越える知恵が「仕組み化」だった。

磨いた強みが新たな事業を生んだ。蓄積した教材や研修動画を、各地の NPO など12 団体に一昨年から有償で提供している。「考え方も組織もしっかりしている李さんのところでは、ここまではできない」。提携先の NPO 法人 いるか（福岡市）が評価する。

学習支援だけでは終わらない。家で満足に食べられず、学校のない 夏休み になるとやせてしまう子を見てきた。不登校 や発達障害 のため教室に入るのがつらい子とは、一緒に絵を描き、バスルをして過ごした。「手を差し伸べるのが早いほど、ワニの口のように開いてゆく格差を狭められる」。4年前から低学年の子の居場所支援を始めた。放課後と一緒に遊び、宿題 を見守り、食卓を囲む。生活習慣や人への信頼感を育み、家庭を支える。

足りないと感じていた高校生への学習支援も昨年から一部で始めた。ラーニング・フォー・オール。「すべての子に学びを」の名の通り、6歳から18歳まで切れ目のない支援に挑む。

（文・各務滋 写真・越田省吾）

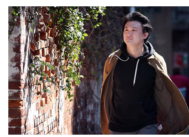


「フロントランナー」李炯植さん 「僕は補助輪。胸を張るのは子どもたち」

有料記事

2020年4月25日 3時30分

シェア ツイート フォックページ スクラップ メール 印刷



（1面から続く）

——学習支援の道に入ったいきさつは。

兵庫県 尼崎市の貧困家庭の多い団地で育ちました。父は「コンビニ店長。母は 薬剤師 で、うちはそこそこ貧しくはなかったけど、小学校の友だちにはひとり親家庭や僕のような 外国籍 の子も多かった。冬場にホームレスの人が乗って救急車で運ばれるのを見かけたこともありました。



僕は担任の先生が「君は勉強できる環境に行かないさ」と勧めてくれて、報徳学園 中高から 東京大学 に進みました。でも、成人式で再会した友人は、親がお金を出してくれず専門学校をあきらめて働いていたり、シングルマザーで子どもが3人いたりした。中学で一步進んだだけなのに、

それから格差や貧困に興味を持ちました。ところが大学の友人には話が通じない。「馬鹿だからかいたない」「努力が足りなかったんでしょ」と。教育や哲学を学び、その怒りや違和感を冷静な課題設定に変わりました。研究者になる前に現場を見ておこうとボランティアに参加したのが、大学3年の終わりででした。

■卒業生がつなぐ

——企業や財団からの支援が多いですね。どうして獲得できるのですか。

ひとつには、僕が僕体験のある当事者だからでしょう。もうひとつは、うちでボランティアをした卒業生のネットワークです。

ある人材会社では2年続けてうちの卒業生が社内の新人賞を取ったことで、社長に興味を持ってもらえました。ゴールドマン・サックスから支援を得られたのも、学生時代から一緒にやってきた弁護士がついてくれたのです。

学習支援の団体は自治体の委託事業に収入を頼りがちです。それだと制度が変わったり事業者選定に負けたりすることで活動の幅が狭まってしまふ。委託と寄付のバランスを取りたい。常々そう思っていました。

——企業側にとってメリットは何だと思われますか。

若い世代の社会課題への関心の強さを企業も知っていて、変わろうとしている印象は受けます。まだ一部ですが。大企業に動ける人が、僕らと接点を持つことで、日ごろ縁のない格差や貧困という社会の負の部分を見るのは、いいことだと思います。

見学に来る企業の人には自分たちができていないことも含め、ありのままを伝えます。本当に共感してくれる人たちがコミュニティを作りたいたいで、——ボランティアはどうやって育てていますか。

いつも僕らが伝えるのは「あなたが子どもを変えようと思わないで、僕らは補助輪ではない。いつ取れたかなって子どもは忘れてくれて構わない。『自分がんばったからできたんだ』と胸を張ってほしい。

毎年約千人の学生が応募してくれる中から300人を選んでいます。採用例には計50時間の研修がありますし、授業の準備だけで週に10～15時間を割いてもらうことになります。

——相当の負担ですね。

それもあるけど、2年ほど前から教材をクラウドに蓄えて、みんなで共有するようにしました。絶対だれかが同じようなものを作っているのに、みんな膨大な時間をかけて教材を作っていたので、「量化」して、空いた時間を創意工夫に回そうと。働き方改革のご時世だし、創設当時に大変すぎてメンバーが次々に辞めていった反省もあります。

——他団体への教材や研修の提供を始めました。連携運動の狙いは何ですか。

貧困は国の問題。最終的には国の制度を作り国費で解決すべきです。その政策提言をしたい。でも、うち単独では無理です。全国に支援の要する子は280万人いますが、僕らが関われるのは1千人ですから。

まずノウハウを提供を通じて各地の団体とつながる。そのうえでみんなで同じ指標をもって子ども支援の効果を測り、提言を裏付けるデータを得たいのです。

■子どもを主題に

——大学院に修士号を取ったそうですね。これからどうします。

研究はしたいんですが、やっぱり僕は経営者なのかな。子どもの貧困を解決の実践者でありたいです。組織が大きくなり、もう1人で何かできる段階ではない。現場スタッフや資金を集める人、研究者と多様な人々がプロジェクトに参加できる基盤を作るのが僕の仕事だと思います。

最近うちで支援している子どもたちと一緒に遊んで気づいたことがあります。僕は7年ほど、分別で移動して大勢の人と会う生活をしてきた。一方の子どもたちは学校、家、公園と小さな圏内で遊ばれた人と暮らしています。

生活者の感覚を失うと、「貧困解決」と言ってもこの子たちの生活がどうなればいいのか、実のある言葉で語れない。現場の職員と議論していても問題を抽象化するから伝わりません。でも、子どもたちを主題にして語ればわかり合える。大切にしたいと思います。